Osaka University Knowledge Archive

Title	１９・２０世紀の英国小説におけるアジア表象の変遷：「東洋」の知識化の歴史的・理論的考察
Author(s)	伊勢, 芳夫
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57891
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【60】

氏　　名	伊　勢　芳　夫（いせ よしお）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２４０７２　号
学位授与年月日	平成22年３月23日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学　位　論　文　名	19・20世紀の英国小説におけるアジア表象の変遷－「東洋」の知識化の歴史的・理論的考察－
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　玉井　　暲 （副査） 教　授　服部　典之　　准教授　片渕　悦久

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、１９世紀から２０世紀にかけて、インド、東南アジア、日本などのインド以東のアジアの国々を描いたイギリス小説とイギリス人による旅行記を取り上げ、それらの書物においてアジア表象がいかに展開しているかを分析・考察し、さらにこのアジア表象がそれらの国々における近代化の問題といかに関わっているかを考察した研究である。アジア表象を検証するためのテクスト・資料は、文学作品から政治的文書・思想書までさまざまであるが、その中心となるテクストとしては、ラドヤード・キプリング（１８６５－１９３６）、フォード・マドックス・フォード（１８７３－１９３９）、ジョゼフ・コンラッド（１８５７－１９２４）らの小説家をはじめとして、ラフカディオ・ハーン（１８５０－１９０４）、E. M. フォースター（１８７９－１９７０）から現代小説家のポール・スコット（１９２０－７８）、サルマン・ラシュディ（１９４７－）らに至る小説家の多様な作品群を対象としている。本論文は、第１章の序論から第５章の結論までの５つの章と、使用文献・参考文献一覧から構成されており、総頁Ａ４判で２７６頁、４００字詰め原稿用紙に換算して約８００枚からなる論文である。

論者は、序論において、研究テーマと研究方法について簡潔に説明したあと、第２章以降、本テーマについての詳細な考察にはいる。第２章「「東洋」の知識化の歴史的考察」では、インドに在住する、もしくは在住経験のあるイギリス人であるアングロ・インディアン作家の小説やインドの植民地政策に関与した人物の残した資料・文献を用いて、イギリスのインド統治以来の期間における英語による「インド表象」の成立とその変容、およびそれに伴うインドの近代化への影響について考察する。この考察のなかでは、E. M. フォースター、ポール・スコット、ラシュディらの小説が分析の対象となる。また、ハーンとキプリングの作品の分析を通して、日本の近代化の表象も考察の対象となり、インドの場合との比較検討が行われる。第３章「「東洋」の知識化の理論的考察」においては、まず、英語による表象化によって人間・社会における他者化および周縁化が生じるメカニズムを明らかにするとともに、この西洋中心主義的言説のなかでその他者化・周縁化を突き崩す傾向の文学作品が生まれる可能性をも探る。この前衛的な代表的作品の一つに、論者はポール・スコットの『ラジ４部作』を挙げている。

さらに１９世紀末から２０世紀初頭にかけて、ヴィクトリア朝のそうした閉鎖的な言語空間に新鮮な風穴をあけた小説家の作品として、キプリングの初期短篇「リスペス」、ジェイムズ・ジョイスの『ダブリン市民』中の１篇「邂逅」、コンラッドの『ナーシサス号の黒人』、を取り上げ、文化的記号論の観点からテクスト空間におけるメッセージの語り手と受取り手との相互関係を分析する。また、ヴァージニア・ウルフの『灯台へ』において、全知の語り手から個人の視点への転換を分析することにより複数の文化コードの生成を検証し、そこに前衛性の証を見て取る。

第４章「多層化する小説構造」では、フォード、コンラッド、キプリングの代表的小説を取り上げ、英語言説が拡大・膨張する状況の最前線にあった文学テクストが孕んでいる複眼的言語空間の意味を考察する。まず、フォードの『グッド・ソルジャー』では、特定の価値観の支配を排除するために全知の語り手の視点から決別し、たえず入れ替わる視点の導入が見られることを明らかにする。ポーランド人作家コンラッドの『ロード・ジム』『闇の奥』にあっては、語り手に設定されたイギリス人のマーローが実行する語りと、小説空間全体を流れる低音としての基調との間に捉えがたいズレが窺え、この言語空間のなかに周縁に置かれた他者の意味を前景化するモチーフが潜んでいることを述べる。キプリングの『キム』においては全知の語り手による西洋中心的な語りのもとで、たとえば登場人物の直接的会話の場合に窺えるように、語り手のもつイデオロギーを突き崩すベクトルが機能するモチーフがあることを明らかにする。

最後の第５章では、英語によるアジア表象の出現と変容を考察するに当たり、読者の側において価値の多層化に対応するための文化的越境の意味が問われていることを述べて、本論を終えている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、１９世紀末から２０世紀にかけて、インド、東南アジア、日本などのインド以東のアジアの国々を描いた英国小説やイギリス人による旅行記を主に取り上げ、それらの作品において「アジア表象」が窺えるありようを的確に把握し、この「アジア表象」が孕んでいた重要な諸問題の分析と時間的経過のなかで変容する意味とを考察したスケールの大きな文学研究である。この研究により、伝統的な英文学研究の網からもれていたアングロ・インディアン作家の紹介・発掘や、フォード・マドックス・フォード、ラドヤード・キプリング、ラフカディオ・ハーンらの従来あまり注目されなかった作品が新たな意味を付加されて読み直されるに至ったのは、英文学研究への大きな貢献である。さらに、本論文で取り上げられた小説家たちにあって、みずから異文化的価値との相克・葛藤を意識するなかで、ヴィクトリア朝時代の閉塞した文学世界を克服した、複数の文化コードの共存を可能にする革新的な言語空間が創出されている事実が、キプリングやコンラッドらの真正面から異文化を物語空間に取り入れた作家のみならず、フォードのような伝統的な小説形式を踏襲した作家やヴァージニア・ウルフらのようなモダニズムの小説家の作品にあっても共に見られることを解き明かした功績は高く評価されねばならない。「アジア表象」を一方的に批判的に見るのを避け、その功罪の両面を見据える視点を設定し、文学・文化のポジティヴな産出性との間にコンテクストを打ちたてようとする姿勢には、価値の多元性を直視しようする論者の真摯な姿勢が表われている。この姿勢は、キプリングがインド表象を実行した小説『キム』についての優れた重厚な作品論となって結実している。

ただし、本論文において疑問点がないわけではない。論者の主張する概念「アジア表象」について、そのカヴァーする領域が多分野に及ぶためその輪郭が不鮮明に陥る場合が時々見られる。論点の整理がより一層求められよう。また、本論全体の構成についても総論と各論との間にいささかバランスの悪さが感じられるのも惜しまれる。

しかし、これらの点は本論文の優れた価値を損なうものでは決してなく、よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。